



特集 図書館における「メンタルヘルス・サービス」	1-3
司書課程 工藤 邦彦 人間関係学科 榊原 有紀	
読む者の行き先	史学・文化財学科 赤松 秀亮 4
知の発酵が、社会を結ぶ ― 発酵学における〈知の編集〉―	発酵食品学科 齋藤 圭 4
大分県立図書館インターンシップ参加学生の声	
見えない仕事に支えられた図書館	史学・文化財学科3年 姫野 佑菜 5
図書館の仕事は体力勝負!	史学・文化財学科3年 園田日菜子 5
やりがいのある選書業務	史学・文化財学科3年 梶原 拓真 5
司書課程 行事レポート	司書課程 佐藤 晋之 6-7
司書資格取得に際する単位修得及び科目履修一覧	8
司書教諭資格取得に際する単位修得及び科目履修一覧	8

## 特集 図書館における「メンタルヘルス・サービス」

対談 工藤 邦彦 (司書課程) 榊原 有紀 (人間関係学科)

### ① 図書館における「メンタルヘルス・サービス」とは？

**工藤：**図書館では「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法 2016 年 4 月施行）」をふまえ、図書館側にある利用面でのバリアを取り除く障害者サービスに取り組んでいます。障害者サービスとは、視覚障害、聴覚障害、肢体障害、精神障害、知的障害、内部障害などを持つ方々への適切な資料提供や読書支援を指します<sup>1)</sup>。また、サービスの対象には高齢者や病院など施設におられる方も含まれるのですが、健康医療情報を提供する図書館も増えています<sup>2)</sup>。昨今は労働環境や人間関係など日常生活でこころの健康を損なう方も増えており、図書館でもそのような方のセルフケアやリカバリーを助ける取り組みがみられます。そこで、今回は、図書館における障害者サービスと健康医療情報サービスに関わる「こころの不調や精神障害を抱える方々」<sup>3)</sup>に向けた「メンタルヘルス・サービス」について、文学部人間関係学科の榊原有紀先生と一緒に考えていきます。

**榊原：**人間関係学科で心理学領域を担当しております榊原有紀と申します。どうぞよろしくお願いいたします。これまで精神科病院において、患者さんやご家族のこころの健康に関わる支援に携わってまいりました。障害者サービスというと、視覚障害や聴覚障害のある方々への支援が思い浮かびますが、こころの不調や精神障害を抱える方々にとっても、図書館は安心や回復につながる大切な資源になり得ます。

今回、「メンタルヘルス・サービス」という視点から図書館について考える機会をいただき、心理職・大学教員の立場で、考えを深めていけることを大変うれしく思っております。

**工藤：**どうぞよろしくお願いいたします。ところで、先生は



写真1 大分県立図書館「闘病記」の書架  
榊原有紀先生(左) 工藤邦彦先生(右)

心理学がご専門ですが、図書館に「メンタルヘルス・サービス」というカテゴリーがあることをご存じでしたか。

**榊原：**正直、図書館の「メンタルヘルス・サービス」という名称で体系的に意識したことは、これまであまりありませんでした。ただ、臨床や教育の現場で人と本との関わりを見てきた経験から、図書館がこころの健康に果たしている役割は決して小さくないと感じています。近年、その働きが「メンタルヘルス・サービス」として整理されてきていることに、改めて関心を持ちました。

**工藤：**図書館における「メンタルヘルス・サービス」とは「利用者をより精神的・内面的に支援し、その病状の回復や緩和に関与する本を読むことを通じ実践するサービス」です<sup>4)</sup>。外部の医療機関や NPO 法人等と連携し、こころの不調や精神障害を抱える方々に向けてサービスを行っている図書館も

あります<sup>5)</sup>。このような図書館は「メンタルヘルス活動の拠点」(Libraries as mental health hubs) となり、人々を支えているわけです<sup>6)</sup>。

**神原：**精神科医療の分野では近年、薬物療法などの進展により、症状の軽症化や入院期間の短期化が可能となってきました。一方で、症状の特性や当事者の繊細さに配慮する必要があります。結果として入院が長期化することも少なくありません。そのため精神科病棟は、単なる「治療の場」とどまらず、患者さんにとっての「生活の場」としての役割を担うことがあります。

こうした背景から、精神科病棟やデイケアなどの通所施設には、図書室や図書コーナーが併設されていることが少なくありません。そこは、余暇の時間を埋めるための場所というだけでなく、思考や感情を整理し、精神活動を支える大切な場所・空間として機能しています。

私自身、心理職として関わるなかで、図書コーナーを通じて入院中の方々と多くのやり取りを重ね、学ばせていただいた経験があります。本は治療そのものではありませんが、言葉になりにくい思いや回復への歩みをそっと支えている場面に、何度も立ち会ってきました。こうした経験からも図書館を軸とした「メンタルヘルス・サービス」が日本でも今後さらに広がっていくのではないかと感じています。

## ②メンタルヘルスデーに関する展示

**工藤：**先生のご経験をお聞きし、本の持つ力や読書の効用をあらためて認識しました。日本における「メンタルヘルス・サービス」は発展途上ですが、それに近い取り組みもあります。例えば、図書館での世界メンタルヘルスデーを紹介した展示が挙げられます。1992年、世界精神保健連盟がメンタルヘルスに関する意識の向上と、正しい知識の普及を目的として10月10日を世界メンタルヘルスデーと決めました<sup>7)</sup>。ちなみに、大分県立図書館では2025年10月に『ここを知る ところを守る』と題した特別展示を行いました。

**神原：**図書館での展示を通じたこうした取り組みは、メンタルヘルスを「特別な人の問題」とせず、誰にとっても身近なテーマとして考えるきっかけを与えてくれます。心理臨床の立場から見ても、安心できる場所で本や情報と出会うことは、ところを整える第一歩になり得ます。医療や福祉の場だけで



写真2 大分県立図書館 世界メンタルヘルスデーについての展示架

なく、図書館という開かれた場所・空間が、そっと支えとなる役割を果たしていることに、大きな意義を感じます。

## ③闘病記、医療・健康情報コーナーの設置

**工藤：**図書館では一般の市民に向け、さまざまな健康医療情報サービスを提供しています。サービスのひとつとして、闘病記コーナーの設置があります。コーナーには病気をどう捉え、向き合い生きるか、その過程が綴られた本などが置かれます。闘病記文庫とも呼ばれ、書架に病名ごとに見出しを付け、興味・関心のある本を探しやすいように排架し、情報を必要とする利用者の方への便宜を図っています<sup>8)</sup>。大分県立図書館には、闘病記の書架が設置されています[P.1. 写真1]。

また、奈良県立図書館では、医療・健康情報コーナー(介護・認知症に関する本)と、闘病記コーナーが設置されています。



写真3  
奈良県立図書館  
医療・健康情報コーナー



写真4  
奈良県立図書館  
コーナー書架

**神原：**闘病記コーナーや医療・健康情報コーナーの設置は、利用者が自分のペースで情報や体験に触れることを可能にする、非常に大切な取り組みだと感じます。病名ごとに整理されていることで、探す負担が軽減され、安心して本と向き合える環境づくりにつながっているように思います。

**工藤：**そうですね。利用する方にとって、病名や症状から必要な本を探せる仕組みは、とても助かると思います。

## ④読書セラピーの実践

**工藤：**ところで、ヨーロッパの図書館では「メンタルヘルス・サービス」の一環として読書セラピーを行っています。ビブリオセラピー、読書療法とも言います<sup>9)</sup>。読書セラピーとは、「こころの不調や精神障害を抱える方々」への治療の一種として本を提供し、利用してもらう療法です<sup>10)</sup>。イングランドでは、2013年に Reading Well Books on Prescription (処方箋によって本をよく読む方法) という読書セラピーのスキームが開発されました。この読書セラピーでは、精神医学やメンタルヘルスの専門職が、図書館の蔵書をもとに患者さんや家族の方に向けて治療に適切な本を処方し、その処方を受けて図書館が本を通じ健康情報を提供しています。また、デンマークの図書館では、読み聞かせと併せて参加者同士が対話するリーディングアワーというイベントを開催しています<sup>11)</sup>。

**神原：**読書セラピーは、心理や福祉領域の専門職と図書館が協働することで、本を「支援のツール」として活用する試み

といえます。私も臨床現場で、認知症の高齢者と絵本を読む『絵本の会』を行ってきました。懐かしい物語を共有することで、参加者同士の語りや感情のやりとりが自然に生まれ、本が人と人をつなぐ媒介になることを実感してきました。

**工藤**：回想法と呼ばれるものですね。対話を通じ、参加者間で新たなつながりが生まれそうです。

**神原**：はい。この経験からも、図書館が提供する本との出会いは、専門職と連携することで、こころを支える大切な資源になり得ると感じています。

**工藤**：参加された方々と本を通じた交流で、孤立の解消や希望を見出すことができればいいと思います。身近な図書館で、患者さんやご家族の読書ニーズを満たす細やかなサービスが提供できるといいですね。

## ⑤「メンタルヘルス・サービス」の普及に向けて

**工藤**：ご紹介した読書セラピーでは、メンタルヘルス・プロフェッショナルの支援を受け、読書活動が行われていることがうかがえます。また、アメリカの図書館では精神医学、心理学などの領域の専門職と協働し「メンタルヘルス・サービス」が本格的に取り組まれています。それに比べ、日本の図書館では専門職との協働はみられません<sup>12)</sup>。日本の図書館でも住民のメンタルヘルスケアに着目したサービスが行われ、「活動の拠点 (hubs)」となることを期待しています<sup>13)</sup>。

**神原**：読書は、知識を得るための手段であると同時に、気持ちを落ち着かせたり、自分の内面をそっと見つめ直したりする営みでもあります。臨床の場に身を置いてきた立場からも、本を介した関わりが人の心に与える穏やかな力を実感してきました。

欧米でみられる読書セラピーの取り組みや、日本の図書館で行われている展示・闘病記コーナーなどは、図書館が「静かに支える場所」として機能し得ることを示しているように思います。そこでは、専門的な治療を担う医療機関とは異なるかたちで、利用者が自分のペースでこころと向き合うことができます。

日本でも、心理や福祉領域の専門職と図書館がゆるやかに連携しながら、無理のないかたちでメンタルヘルスを支える取り組みが広がっていくことを期待しています。図書館が、誰かにとって「少し立ち寄りてもよいこころの居場所 (オアシス)」となることは、地域全体の安心感につながるのではないのでしょうか。

**工藤**：おっしゃるとおりです。日本の図書館でも「メンタルヘルス・サービス」を行う意識が高まり、「SDGs 目標 3 (すべての人に健康と福祉を)」にも合致した誰ひとり取り残さないような社会」へと一歩ずつ近づくといいですね。

**神原**：そうですね。これから図書館での取り組みが広がり、メンタルヘルスへの関心や理解が深まることを願っています。

取材、写真掲載にあたり、大分県立図書館、奈良県立図書館情報館のご支援をいただき、感謝申し上げます。

## 【引用・参考文献・注】

- 1) 図書館サービスでは、「社会的なバリアによって被害を受けている事象・人」という意味で「障害・障害者」という表記を使用しています。(日本図書館情報学会編『図書館情報学用語辞典 第5版』日本図書館情報学会、2020年、p.105。野口武悟著『誰ひとり取り残さない図書館サービス：多様なニーズに寄りそう8つの事例』三和書籍、2025年、p.3.)
- 2) 池谷のぞみ 国内の公共図書館における健康医療情報サービスの最近の動向。「カレントアウェアネス」No.337 2018年、p.20-26.
- 3) 「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」第五条では、「精神障害者とは、統合失調症、精神作用物質による急性中毒又はその依存症、知的障害、その他の精神疾患を有する者」と定義されています。
- 4) 鈴木尊紘 欧米の図書館における精神障害者向けサービス。「カレントアウェアネス」No.352 2022年、p.24-28.
- 5) 市民のメンタル・ヘルスケアを行う図書館の取り組みには、久留米市立中央図書館での保健所との協働による『こころの相談カフェ』やシカゴ市公衆衛生局と地域の図書館が連携した相談事業などがあります。(中山愛理. メディカル/ヘルス・リテラシーと図書館：自分と家族の健康の自己管理. 山本順一ほか編、『これからの図書館情報学：人工知能と共生する図書館』有斐閣、2025年、p.213-216. 久留米市立図書館における「こころの相談カフェ」の取組み 「カレントアウェアネス-E」No.330 2017年、<https://current.ndl.go.jp/e1939> 2026.1.19 アクセス
- 6) アメリカ心理学会 <https://www.apa.org/monitor/2020/04/libraries-health-hubs> 2026.1.1 アクセス
- 7) 厚生労働省 2025 [https://www.mhlw.go.jp/kokoro/mental\\_health\\_day/index.html](https://www.mhlw.go.jp/kokoro/mental_health_day/index.html) 2025.11.10 アクセス
- 8) 闘病記文庫の詳細を知りたい方は、石井保志著『闘病記文庫入門：医療情報資源としての闘病記の提供方法』(JLA 図書館実践シリーズ 17) 日本図書館協会、2011年、212p. を読まれることをおすすめします。
- 9) 北海道の滝川市立図書館では、「悩みの症状に効く本を、書名がわからないようにして薬袋に見立てた袋に入れて展示する『BOOK セラピー』を行っています。(深村清美 BOOK セラピー：本のお薬は、あなたのそばの図書館へ <https://current.ndl.go.jp/e2593> 2025.12.31 アクセス)
- 10) 寺田真理子著『心と体がラクになる読書セラピー』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2021年、p.72-80.
- 11) 前掲 4)
- 12) 山本順一 公共図書館のメンタルヘルス・サービス機能について考える。「図書館学」No.126. 2025年、p.27-34
- 13) 市石は、事例をもとに我が国の公共図書館における精神障害のある方々への支援の在り方を論じています。(市石美寿々 公共図書館における精神障害者への取り組み：埼玉県立久喜図書館に着目して。「文学研究論集」第60号 2024年、p.37-50.)

文学部人間関係学科 石川須美子先生のご冥福をお祈り申し上げます。(神原有紀・工藤邦彦)



# 学科の先生方から学生へのメッセージ



## 読む者の行き先

史学・文化財学科 赤松 秀亮

司書課程を履修するべきかどうかなんて、正直に言えば、たいした問題じゃない。やりたいことがもう決まっているなら、そちらへ進めばいい。それだけの話だ。世界は意外と広く、人生はわりと短い。

ただ、君たちは文学部の史学・文化財学科にいる。大学で「歴史学をやる」と腹を決めた人は、何をしているのだろう。本を読み、論文を読み、史料を読む。大量の文字に囲まれて意味を拾い集め、頭のなかでそれらを組み立て、学期末には期限までにレポートを書く。そうして時間は過ぎていく。

歴史学というのは、完成された物語を覚える学問ではない。図書館の奥で、誰が次に開くかもわからない史料を読み、別の誰かが書いた論文を何本も読み比べて、どこまで信用していいのか、どこから疑うべきなのかを考える。言ってみれば、情報という深い水の中に潜り、必要なものを静かに引き上げる作業だ。

それを四年間も続けていれば、「本を読むのはわりと好きだ」「調べ物はそれほど苦じゃない」と、少なくとも自分には言えるようになるはずだ。それなのに、司書という仕事を最初から選択肢の外に置いてしまう理由が、僕にはよくわからない。

なりたいものが思いつかない？それなら、なおさらいい。無理に立派な夢を用意する必要はない。本を読むことが嫌いじゃなく、情報を探す手間をそれほど苦に感じないなら、司書という仕事は、静かに君を待っている。

つぶしが利く資格かと言われれば、正直、利かない。派手でもないし、大金が稼げるわけでもない。正規雇用にならなければ、身分だって安定しない。ヒーローにもヒロインにも、たぶんなれない。

でも、図書館に来る人は、たいてい何かを探している。明確な答えかもしれないし、逃げ場かもしれないし、ただの暇つぶしかもしれない。そのときに、「読むって、案外悪くないですよ」「調べるなら、こういう道もありますよ」と、ほんの少しだけ方向を示す。司書というのは、そういう仕事だ。

人と知をつなぐ仕事、と言えば、少し格好が良すぎるかもしれない。実際には、カウンターで貸出・返却処理をしているだけの時間も多し。

それでも、一冊の本が、一人の人生をほんの少しだけ動かすことは、確かにある。文学部で史料を読み、論文を読み、言葉と付き合ってきた人間にだからこそできる仕事がある。司書課程は、その延長線上に置かれた選択肢のひとつだ。

やるかどうかは自由だ。ただ、知らないで過ごすのは、少しだけ惜しい気がする。

## 知の発酵が、社会を結ぶ

— 発酵学における〈知の編集〉—

発酵食品学科 齋藤 圭

発酵食品学科において司書課程を履修する意義は、専門分野における「知を生み出す力」と、それを社会へと「知としてつなぐ力」を同時に養える点にあります。

発酵食品学科では、微生物学や化学、栄養学、地球環境科学といった理系分野に加え、食文化や地域資源、流通経済など、人の暮らしと深く結びついた内容を学びます。発酵という現象は単一の分野だけで理解できるものではなく、さまざまな知識を結びつけて考える姿勢が求められます。司書課程で学ぶ文献検索や資料整理の方法は、こうした学びを支え、専門理解をより確かなものにします。

また、発酵食品は研究対象であると同時に、地域に根ざした文化でもあります。過去の記録や文献、地域に残された資料を読み解く力は、発酵技術や食の知恵を将来へと受け継ぐために欠かせません。司書課程では、資料を保存し、活用する視点も学びます。これは、研究成果をまとめる力だけでなく、その価値を多くの人に分かりやすく伝える力へとつながります。

現代社会では、インターネット上に多くの情報があふれています。その中から信頼できる情報を見極め、正しく活用する力は、研究者を目指す学生に限らず、社会で生きていくうえで重要な素養です。司書課程は、情報を集める技術だけでなく、情報と冷静に向き合う姿勢を育てる学びでもあります。

発酵食品学科で司書課程を履修することは、専門性を深めながら、その知を社会と結びつける視野を広げることにつながります。発酵の学びを、研究、地域、そして人々の暮らしへと橋渡しできる人材を育てる点に、大きな意義があるといえるでしょう。





## 見えない仕事に支えられた図書館

史学・文化財学科3年 姫野 佑菜

県立図書館の役割や雰囲気より深く知りたいと考え、インターンシップに参加しました。三日間で、館内見学や選書実習、カウンター見学、配架やクリーニング作業など、幅広い業務を体験しました。中でも最も印象に残っているのは三日目で、閉架書庫から開架書庫、中央カウンターまで、利用者の目に触れにくい場所と直接関わる場の両方を体験できたからです。

県立図書館は地上三階・地下一階の構造で、職員は本を載せたワゴンを優先するため、基本的にエレベーターを使用しません。館内の移動は想像以上に体力を使い、配架作業やクリーニング作業も実際に体験すると肉体的

働だと感じました。特に配架では、誤った場所に戻された本を正しい位置に戻すため、書架全体を動かすこともあり、腕や腰への負担を実感しました。また、開架書庫では利用者の動きに配慮しながら作業する必要があり、集中力と気遣いが求められました。

今回の実習を通して、司書の仕事には利用者からは見えにくい、細かく根気のある業務が数多くあることを知りました。選書においても、一冊一冊を基準に照らして判断しており、「見える仕事」だけが職業の全てではないと強く感じました。

今後は、イメージだけで進路を判断するのではなく、実体験や情報収集を重ねながら、自分に合った選択ができるよう努めていきたいです。

## 図書館の仕事は体力勝負！

史学・文化財学科3年 園田 日菜子

皆さんは、図書館の仕事にどのようなイメージを持っているのでしょうか。私は当初、静かに一人で黙々と行う仕事だと思っていました。しかし、今回のインターンシップを通して、図書館の仕事は想像以上に体力とチームワークが求められる仕事だと知りました。

図書館では多くの本を扱うため、配架やクリーニング、本棚の点検など、筋力と体力を使う作業が日常的に行われています。広い館内を移動することも多く、職員用エレベーターは本を載せたワゴンが優先されるため、階段移動が基本です。運動不足の私には大変に感じましたが、淡々と業務をこなす職員の姿はとても頼もしく、印象に残りました。

一方で、こうした業務を支えているのがチームワークです。カウンター業務では、貸出・返却対応と並行して配架やクリーニングを分担し、職員同士が声を掛け合いながら交代で作業していました。報連相が徹底され、互いに助け合う姿から、安心して働ける環境が整っていると感じました。

選書業務でも、職員同士が意見を交わしながら判断しており、一人では担えない専門性の高さを実感しました。相談し合える関係性や、職場の温かい雰囲気もチームワークを支える大切な要素だと思います。

この三日間を通して、図書館サービスは職員一人ひとりの努力と、良好なコミュニケーションに基づくチームワークによって成り立っていることを学びました。この学びを、今後どのような場面でも生かしていきたいです。

## やりがいのある選書業務

史学・文化財学科3年 梶原 拓真

今年の夏、大分県立図書館でのインターンシップに参加し、選書やカウンター業務、館内見学などを体験しました。中でも特に印象に残ったのは選書業務です。思想的な偏りがないか、内容に十分な信憑性があるかなど、複数の条件を考慮しながら実習生同士で悩み、意見を申し合いました。自分たちが選んだ資料を利用者が手に取る姿を想像すると、大きなやりがいを感じました。

館内見学では、書庫に保管された膨大な資料を目の当たりにし、図書館が教育機関であり、次世代へ知を継承する場であることを強く実感しました。一方で、書庫には限りがあり、年月の経過とともに除籍が必要になるこ

とも知りました。そのため、適切な選書と慎重な除籍が不可欠であり、その判断に司書が大きな責任と葛藤を抱えていることを学びました。

また、カウンター業務では、利用者から資料を求められた際に「わからないでは済まされない」という職員の言葉が印象に残りました。資料を迅速に提供するためには、日頃から資料を正確に管理し、所在を把握しておく必要があります。情報資源の組織化という地道な作業が、利用者の満足につながっているのだと実感しました。

今回のインターンシップを通して、図書館サービスは多くの努力と専門性に支えられていることを学びました。今後は授業で得た知識を現場と結び付けながら、自身を成長させ、責任ある社会人を目指したいです。

# 司書課程 行事レポート — 図書館の現場で学ぶ、つながって広がる —

司書課程では、講義・演習といった正課の授業に加え、図書館の現場での体験学習を重視しています。今年度も、図書館見学ツアー、県立図書館オリエンテーション、司書による講演会、各館でのインターンシップを実施しました。本記事では、学生が実際に参加した主な行事と学びの様子を紹介します。

佐藤 晋之 (司書課程)

1

## 大分県立図書館オリエンテーション

### — 図書館のしくみと役割を知る

司書課程履修者を対象に県立図書館でのオリエンテーションを実施しました。館内見学では、閲覧エリアだけでなく、書庫やバックヤードの動線、資料保存の方法、配架の考え方などについて説明を受けました。公共図書館の中核としての機能や、市町村図書館との連携、レファレンスサービスの実際についても学び、図書館サービスが多層的な業務によって支えられていることを理解する機会となりました。参加した学生からは「裏側の工夫を知って見方が変わった」という声も聞かれました。



## 公開講座「司書のしごと講演会」

### — 現場のリアルから進路を考える

2

現職司書や図書館経験者を招き、仕事の内容やキャリア形成についての講演会を開催しました。選書、レファレンス、展示企画、地域連携事業など、日常業務の具体例に加え、利用者対応で大切にしている姿勢や専門職としての責任についても語っていただきました。「図書館は人と情報をつなぐ仕事」という言葉が特に印象に残り、学生にとって将来像を具体的に描く手がかりとなりました。質疑応答も活発に行われ、職業理解を深める時間となりました。



#### 学生の声 (抜粋)

- ・図書館の仕事は静的なものだと思っていたが、実際はとても動きのある仕事だと分かった
- ・利用者対応の難しさとやりがいを具体的にイメージできた
- ・進路として本気で考えるきっかけになった

3

## 他県図書館見学ツアー

### — 図書館の多様なかたちを知る

学外研修として、特色ある図書館を訪問する見学ツアーを実施しました。施設設計、サービス展開、地域との連携方法などを現地で観察し、図書館ごとの運営方針や重点分野の違いを比較しながら学びました。担当職員の方から直接説明を受けることで、サービス設計の意図や利用者ニーズへの対応について理解を深めることができました。同じ公共図書館でも機能や雰囲気が大きく異なることを体感し、視野を広げる機会となりました。



## インターンシップ

### — 現場実習で実務を体験する

4

別府市立図書館、大分県立図書館、豊後高田市立図書館などでインターンシップを実施しました。実習では、配架、資料整理、カウンター補助、展示準備、イベント支援などを体験し、授業で学んだ知識が現場でどのように活かされているかを確認しました。利用者サービスの現場に立つことで、判断力やコミュニケーションの重要性を実感したという感想が多く寄せられました。実務を通じて、専門職として働くイメージを具体化する貴重な機会となっています。



図書館流通センター(TRC)による採用説明会(学内)

## 体験が学びを 深くする

司書課程では、教室での理論学習と現場体験を組み合わせ合わせた教育を進めています。実際に見て、聞いて、体験することで理解はより確かなものになります。今後も図書館や関係機関と連携し、実践的な学びの機会を充実させていきます。

## 司書資格取得に際する単位修得 及び科目履修一覧

### I. 手続きの流れ

履修願教務課提出(1月) → 判定会議結果通知(4月)  
→ 合格 → 司書科目新規履修  
登録初年度のみ 課程履修費 12,000円 納入(前学期)

#### 1. 修得単位数について

- 1年次に履修届を提出する場合には、1年次終了時において卒業に必要な単位を35単位以上修得していること。
- 2年次に履修届を提出する場合には、2年次終了時において卒業に必要な単位を70単位以上修得していること。
- 3年次、4年次に履修届を提出する場合には、各年次終了時において卒業に必要な単位を100単位以上修得していること。

#### 2. GPAについて

- 1年次に履修届を提出する場合には、原則として1年次終了時において通算のGPAが2.0以上であること。
- 2年次に履修届を提出する場合には、原則として2年次終了時において通算のGPAが2.0以上であること。
- 3年次、4年次に履修届を提出する場合には、原則として各年次終了時において通算のGPAが2.0以上であること。

### II. 学年別科目体系

開講年次	科目	区分	単位	備考
2年次	生涯学習論Ⅰ(文・国経) または生涯学習概論		2	①
	図書館概論		2	①
	図書館制度・経営論	時間外・フルオンデマンド	2	①
	図書館サービス概論		2	②
	情報サービス論		2	②
	情報サービス演習Ⅰ (情報検索)		1	②
	図書館情報資源概論		2	③
	情報資源組織論		2	③
3年次	児童サービス論		2	②
	情報サービス演習Ⅱ (レファレンスサービス)		1	②
	情報資源組織演習Ⅰ (目録)		1	③
	情報資源組織演習Ⅱ (分類)		1	③
	図書館情報技術論		2	①
	図書館サービス特論	□	1	2科目 選択
	図書館情報基礎特論 (アーカイブズ特論)	□	1	
	図書館情報資源特論 (郷土資料特論)	□	1	
卒業時	講義2単位(9科目)+演習1単位(4科目)+選択1単位(2科目)= <b>24単位(13科目)</b>			

凡例: □ 選択科目  
① 基礎科目 ② 図書館サービスに関する科目  
③ 図書館情報資源に関する科目

## 司書教諭資格取得に際する単位修得 及び科目履修一覧

### I. 司書教諭資格取得に際する注意点

教職課程と併せて司書教諭課程を履修すること

#### 1. 修得単位数について

- 1年次に履修届を提出する場合には、1年次終了時において卒業に必要な単位を35単位以上修得していること。
- 2年次に履修届を提出する場合には、2年次終了時において卒業に必要な単位を70単位以上修得していること。
- 3年次、4年次に履修届を提出する場合には、各年次終了時において卒業に必要な単位を100単位以上修得していること。

#### 2. GPAについて

- 1年次に履修届を提出する場合には、原則として1年次終了時において通算のGPAが2.0以上であること。
- 2年次に履修届を提出する場合には、原則として2年次終了時において通算のGPAが2.0以上であること。
- 3年次、4年次に履修届を提出する場合には、原則として各年次終了時において通算のGPAが2.0以上であること。

### II. 学年別科目体系

開講年次	科目	単位	備考
2年次	学校経営と学校図書館	2	
	学習指導と学校図書館	2	
3年次	情報メディアの活用	2	
	読書と豊かな人間性	2	集中講義(前期)
	学校図書館メディアの構成	2	司書に関する科目 「情報資源組織論」 「図書館情報資源概論」 履修で認定
卒業時	教職課程各種免許状を取得のうえ、翌年に資格認定		



#### 司書課程関連動画



#### 問合せ先

##### 別府大学司書課程

工藤 邦彦

kunikudo@nm.beppu-u.ac.jp

研究室: 24号館4階417室

佐藤 晋之

shinji49@nm.beppu-u.ac.jp

研究室: 18号館4階1843室

2026(平成8)年3月発行  
編集・発行 別府大学文学部司書課程